

◆かっぱ民話シリーズ②◆

# 太郎河童の夢

たろうかっぱのゆめ



作:近藤せいけん

相模の国を流れる、大河相模川。そこに住む太郎河童。一ぴきで気楽であるが、近頃、少し退屈で寂しい。何故か空しい、誰でもいいから仲間が欲しい。

今日も相模川の中程の大堰（おおぜき）の上でだいすきなダイコンをかじりながら、晴れわたった空をぼんやりながめ、「フウ～」と孤独なため息。

「一ぴきでは、寂しいなあ～アア仲間がほしい」

「人間をからかうのも、もうあいた。」

「おれはこれからどうなるのか、話し相手が欲しい」

「昔はよかった。数匹の仲間がいて毎日楽しく暮らしていた。あの頃がなつかしいなあ」

太郎河童の仲間は、かなり昔、新天地を求めて一ぴき

また一ぴき去っていった。命がけの旅にででいった。河童は真水の川では自由自在（じゆうじざい）であるが、海水では長い時間泳ぐことはできない。また歩くことは住みかの周囲しかできない。

「アア～仲間が欲しい！誰がこの川にこないかなあ？しかし来るはずはないよなあ」

太郎河童はいつまでも、ダイコン畑に横に鳴り、遠く高くなった秋空を眺めていた。その時一羽の大ワシが上空を悠然と飛び、大きな輪を描き、だんだん高く遠く、小さくなっていった。

「おれもワシのように自由にどこへでも飛んでいけたらなあ」

太郎河童は寝がえりをうち、自然と涙があふれてきた。

「俺って、孤独だなあ」

「人みたいに、旅ができたらなあ」

「河童の仲間探しにいくのになあ」

「一ぴきじゃ、生きてゆくのが、つらい」

まだ涙が止まらず、そのまま眠りにおちていった。秋空の中、霊峰「大山」がどっしりと静かにそびえていた。



太郎河童は夢をみた。

多くの仲間が相模川に集まり、楽しくおどり、また食べゆかいに笑いあっている。

ある河童はかっぱおどりをし、またあるかっぱは橋の上から思い切り飛び込み大きな水響きをあげ、またあるかっぱは水の中の鮎や、うぐい、こいをおっかけまわし、たまに首をだして、かっぱの得意のなきごえをする。取っ組み合いの相撲をとるかっぱ達、中州に生えた木から対岸につるの縄を張り、つるの上を歩くかっぱ。それはそれは楽しいお祭りさわざ。

いつも輪の中に自分がいた。いつも見る夢であった。

一じんの冷たい風が吹き、太郎河童は眠りから目をさめた。

「また夢か。寂しいなあ」

「ああ、退屈で死にそう」

「何かよい方法はないかなあ」

太郎河童はぼんやりと大山をながめていた。

「そうだ！大山の天狗様をお願いしよう」

「天狗様であれば、願いをかなえてくれるだろう」

「でも、どうすれば、よいのやら？」

太郎河童は座りなおし、霊峰大山にむかい祈った。

「どうかどうか、天狗様のお力で、河童の仲間をよびよせてくださいませ。」

「どうかどうか、お力お貸しくくださいませ」

いつまでも、いつまでも、祈りつづけた。

沈みゆく夕日のなか、一筋の黄金のひかりが放たれた。

しかし、夢中で祈りつづける、太郎河童の目には映らなかった。

(終わり)